

MCP (Model Context Protocol) を通じて考える AI 活用の本質

1. MCP とは何か ―― モデルと文脈を橋渡しする考え方

MCP (Model Context Protocol) は、OpenAI をはじめとする生成 AI 技術の中で注目されつつある概念です。

AI がどのように入力（指示）を理解し、どんな情報を参照しながら出力を行うのか――その構造を整理し、より再現性のある使い方を可能にするための“設計思想”といえます。

MCP は、3 つの要素から構成されます。

- Model (モデル)：AI の頭脳にあたる部分。GPT などの大規模言語モデルが該当します。
- Context (文脈)：AI が理解するための前提情報。対話履歴、外部データ、目的の背景などがここに含まれます。
- Protocol (手順・規約)：モデルと文脈をどう接続し、AI にどのような役割を与えるかのルールを定義します。

この枠組みは、単なる技術仕様ではなく、AI 活用を設計的に理解するための「思考のモデル」としても有効です。

人間と AI の協働を考える上で、この三層構造を意識することが、成果の安定性・再現性・創造性を高める鍵になります。

2. AI 活用を「設計する」時代へ

従来、AI ツールは「使う」ものでした。しかし MCP の視点に立つと、AI は「設計して共に働く存在」へと位置づけが変わります。

この転換の重要なポイントは、AI の出力は入力そのものではなく、設計された関係性の結果であるという理解です。

たとえば、同じ質問をしても、AI にどんな前提 (Context) を与えるかによって、結果はまったく変わります。

「モデルを信頼する」のではなく、「どう文脈を与えるか」「どんな目的で動かすか」を人間が定義することが本質です。

つまり、AI 活用は「命令」ではなく「協働設計」であり、問いの質が結果の質を決めるのです。

3. ファシリテーションと AI ―― 対話から共創へ

今回の勉強会で特に印象的だったのは、MCP という技術的テーマを扱いながらも、それが自然に「対話」や「共創」のあり方とつながっていったことです。

AI を正しく活用するためには、「何を伝えるか」よりも「どのように関係をつくるか」が問われます。

これは人間同士のファシリテーションと同じ構造です。

AI は“道具”であると同時に、人間の思考やチームの関係性を映し出す鏡でもあります。

MCPを理解することは、AIを支配することではなく、AIと人との間に生まれる“理解のプロセス”を観察し、設計することに近い。その意味で、MCPは単なる技術概念ではなく、「AIとの協働における哲学」と言えるかもしれません。

4. 現場での応用とこれからの可能性

MCP的な思考を応用することで、実務のさまざまな場面で成果の再現性を高めることができます。

- ビジネス活用：業務文書の生成や要約の精度を上げる際、前提（Context）を整理して渡すことで一貫性が保たれる。
- 教育・研修分野：学習者のレベルや目的を明示した「Context設計」によって、個別最適化された出力が可能になる。
- チーム運営・会議設計：AIを「対話の補助者」として活用する際、MCPの考え方をを使うと、意思決定プロセスを透明化できる。

今後、AIの役割は「効率化」から「共創」へと広がっていきます。そのときに問われるのは、ツール操作の巧拙ではなく、AIとの関係性をデザインできる人間側の思考力です。MCPは、その新しい知的基盤を築く重要なヒントとなるでしょう。

5. まとめ ― AIと「付き合う力」を育てる

MCPを理解することは、AIを“制御する力”ではなく、“付き合う力”を育てることです。AIをうまく使いこなす人ほど、AIの限界や曖昧さを知り、その上で最適な関わり方を選ぶようになります。テクノロジーの進化が速い今こそ、道具の性能ではなく、「使う人の問い方」が最も重要なスキルです。

今回の勉強会は、その第一歩として、“理解”よりも“体験”、そして“共感”から学びを深める時間になりました。AIと人の共創が日常になる未来に向けて、Creative Guildは引き続き「ゆるくて本質的な学びの場」を育てていきます。

※ご留意ください

本資料は、Creative Guildで開催した勉強会の内容をもとに、AI（ChatGPT）を活用して自動生成されたものです。内容の正確性や完全性については保証できない点をご理解ください。ご自身の判断や追加の調査とあわせてご活用いただければ幸いです。Creative Guildは本資料の内容に対する責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。